



Title	通信衛星を使った日本語教育 : アメリカの高校の実例とその日本語能力調査の報告
Author(s)	真嶋, 潤子; 李, 香順
Citation	日本語教育. 1994, 83, p. 59-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23122
rights	社団法人 日本語教育学会
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(日本語教育83号)

通信衛星を使った日本語教育

—アメリカの高校の実例と その日本語能力調査の報告—

真嶋 潤子・季 香順
(1994. 2. 1 受)

要 旨

教師不足の問題への一つの解決策として、アメリカの高校で通信衛星を使った日本語の遠距離学習がなされている。その状況を、まず、①二つのクラスの授業観察とインタビューにより調べ、遠距離学習がうまく機能するための要因について分析した。「教師」の役割がテレビ講師、電話講師、学習世話係(facilitator)によって補完的になされたクラスとそうでないクラスの比較から、学習世話係の重要性が浮かび上がった。また教室では不安感、緊張感の少ない学習環境が生まれていることに注目し、インプット仮説を裏付ける意味も含めて、引き続き、②学習者の日本語能力について筆記試験と口頭試験を行ったところ、①の分析結果を裏付けるような結果が見られた。また、遠距離学習を行う場合、日本語話者が教室で補助できると、問題の一部は解決されると思われる。

【キーワード】 通信衛星、遠距離学習、学習世話係(facilitator)、インプット仮説、日本語能力

1. はじめに

昨今、年少者に対する日本語教育の要請が強まっているアメリカで、教師不足が問題になっている。特に地方での教師不足は深刻である。その問題への一方策として、通信衛星を使った日本語授業が行われており、筆者らは地元の公立高校での状況を調べる機会に恵まれたので、ここにその報告をしたいと思う⁽¹⁾。まず、①1991年11月から1992年5月までの二クラスの授業観察と、生徒、教師、校長へのインタビューによる調査で、遠距離学習がうまく機能するための要因について分析し、引き続き、②その後1992年6月に行った筆記試験並びに口頭試験により、学習者の日本語能力について調べた。

2. 通信衛星を使った遠距離学習の概要

ジョージア州では1987年にネブラスカ州の本部を基地とする通信衛星を使った教育 (the Satellite Educational Resources Consortium略して SERC [サーシー]) の高校への導入を始めた。1992年度現在、ジョージア州の23の高校で日本語が教えられているが、そのうちこの通信衛星による日本語講座を利用しているのは17校にのぼる。筆者らが訪れたミレッジ高校（仮名）は1989年からそれを利用しており、一年生と二年生の二クラスを開講している。

生徒数は一年生が10名(男子5名、女子5名)、二年生は4名(男子のみ)であった。どちらも月曜から金曜まで毎日50分日本語の授業がある。そのうち週3日は50分のテレビレッスンがあり、残り2日は20分の電話レッスンをするという構成になっている。大体2ヶ月に1回の割で、各クラスがネブラスカのSERCのテレビスタジオと中継で結ばれる順番が廻ってくる。その際には、教室の生徒はネブラスカのテレビ講師と直接スピーカーフォン（複数の人が話せるように受話器が本体に内蔵された電話）を通して話す機会が与えられるが、それ以外の場合は、テレビ講師と他校の生徒が話すのをテレビで見て学ぶということになる。週2回の電話レッスンの時は、生徒全員が電話の講師と毎回スピーカーフォンを通して口頭練習するようになっている。このようにメディアを使って学習する時間のほかに、生徒はネブラスカに送付する宿題や、テストによって指導を受けるように構成されている。

テレビレッスンは典型的には挨拶のあと、各課のテーマに盛り込まれた文法事項の練習へと移行する。そして、テレビ講師と中継された学校の生徒とによって、場面会話やスキットを見ながら、語彙代入練習や質疑応答練習が行われる。それから、いつもではないが、読み書き練習があって、その日のまとめをして終わるという手順になっている。

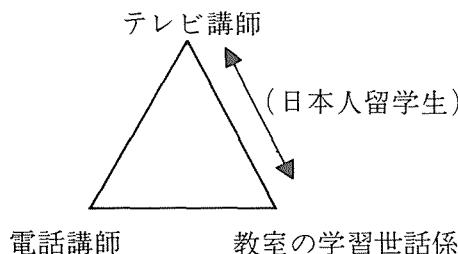
電話レッスンの場合、練習は会話の指導と発音練習にしほられている。スピーカーフォンの回りに集まって座った生徒がコーラスで講師と挨拶した後は、15分余り講師が発する質問に対して、指名された個々の生徒が答えていく練習である。たいてい特定の文法項目に焦点をあてた練習である。

3. 通信衛星講座における特徴

3-1 「教師」の役割

3-1-1 「教師」の役割分担

通信衛星による授業で、最も特徴的なのは、生徒と教師が面と向かい合わないことがある。(生徒の方はテレビ画面を通して教師が見えるが、逆はできない。) 従って、教師が「通常の」教室における授業で果たす多面的な役割を、物理的に担い得ないということになる。T. ライトによれば教師の役割と言うのは大きく言って二つに分けることができる。ひとつは知識の伝達者としての機能 (instructional function) で、もうひとつは学生を管理する機能 (management function) である。SERCの通信衛星講座の場合、前者の機能はテレビの講師と電話レッスンを担当する講師とによってなされるが、後者の機能は現地校の学習世話係と呼ばれる人に委ねられている⁽²⁾。



ミレッジ高校ではこのように、テレビ講師、電話講師、学習世話係の三人によって「教師」の役割が分担されている。このほか、一年生のクラスでは、日本人留学生が一人参加して、補助的役割を果していた。図で示すと上のようになると表せるだろう。

3-1-2 学習世話係 (facilitator) の役割

この通信衛星講座に独特の、教室の学習世話係の管理業務は、①テレビをつけ、②スピーカーフォンをセットし、③郵送テストの日程を掲示し、④出席をとり、⑤生徒を静かにさせ、⑥学習世話係テスト (facilitator test) とよばれるテストを監督することである。まれに、欠席した生徒が後で見られるように、⑦テレビレッスンをビデオに収録しておくこともある。

ミレッジ高校の一年生の学習世話係は、ベテランのスペイン語専門の教師で、SERCの勧めに従って、生徒と一緒に日本語を学んでいるので、以上の管理業務のほかに復習と予習の時間をもうけて、生徒の指導にあたる。

そしてテレビと電話のレッスンの間は、生徒の活発な参加を促しながら、自分自身も積極的に学習活動に参加している。遠距離学習に肯定的な立場をとる彼が言うには、「技術の進歩は我々の専門領域を変えてきています。教室は開かれ、今や物理的な条件で制限されてはいらないんです。」また彼は積極的な姿勢で学習者と指導者の二役をこなしているが、自分の補助的役割を的確に把握している。「私はここでは権威者ではありません。私のスペイン語のクラスでは、私が権威者です。」としつつ、「生徒が何と呼ぼうと、私はクラスでは依然として模範なんです。」と言っている。また、自分をテレビと電話の講師の「同僚」と定義づけ、メディアの講師と生徒のかけ橋となるべく努力していると言う。学習者と教師との両方の側から遠距離学習のメカニズムを見てきた彼は、学習世話係の主たる仕事は遠距離学習に「人間味 (humanness)」をもたらすことだと考えている。メディア講師を(心理学の実験などで使う無機物の)「代理母 ("surrogate mothers")」になぞらえ、彼は講師と生徒との関係を人間らしいものにしようと努力しているのである。

二年生の学習世話係の活動は、これに比べるとはるかに限定されている。彼女は生徒と一緒に日本語を学んではいないので、役割は生徒の管理面のみである。彼女はテレビと電話のレッスンの時だけ生徒と顔を合わせ、復習や予習を指導することはない。レッスン中にも、しばしば彼女は別の本を読んだり、テレビレッスンの間中、教室にいないこともある。しかし、彼女もまた「新しい」形の外国語教育を「なかなか興味深い」("quite interesting") と思ったと言う。商業専門の教師であるので、語学教育にはまったく関わったことがなかったが、「でもこの仕事はたった一年限りのことだし、これに惚れ込むことはないと思って、担当を引き受けました。」と言っている。彼女としては、たとえ生徒と一緒に学びたいと思ったとしても、基礎的知識なしで、いきなり二年生のレベルについていくことはできなかつたであろうことも事実である。

3-1-3 生徒側から見た「教師達」

さて、このようなテレビ講師、電話講師、学習世話係からなる「教師達」に対して、生徒はどう思い何を感じているのだろうか。生徒とのインタビューによると、地位で言えば、彼らの目にはテレビ講師が一番高く、電話講師が二番目、そして学習世話係が一番低く映っている⁽³⁾。どの生徒もテレビ講師が自分達の「先生 (teacher)」であると異口同音に答えたが、電話

講師になると答えはばらばらになる。一年生の学習世話係が表現するようには、「実在のない声 (disembodied voice)」である電話講師の存在を、生徒も的確に位置付けかねているようだ。

しかし、さらに興味深いのは、生徒の学習世話係に対する命名が一様でないことである。頻繁に使われた言い方は「学習世話係 (facilitator)」「管理者 (supervisor)」「指導者 (director)」「調整役 (coordinator)」「教導員 (disciplinarian)」「学級経営者 (manager)」「組織者 (organizer)」である。

一年生の生徒からは、学習世話係に関して、地位は低いのだが教室での役割は極めて重要だという意見があった。生徒の命名の仕方は彼等が知識の伝達ということを「教師」の一義的な役割として取り上げていることを示している。従って、テレビ講師を一番高い地位に置き、学習世話係を最下位に置いたのである⁽⁴⁾。しかし一方で、一年生の生徒のほとんどは、クラスに学習世話係がいなければやっていけない (would not "work") と感じている。ある男子生徒が学習世話係について言った。「彼は日本語を教えるわけではありませんが、私達には依然として先生なんです。テレビ講師は私達と一緒にいられないし、クラスをまとめて運営していくこともできません。」生徒達は明らかに「教師」という言葉の意味する重層的機能を理解しており、彼等にとって、「教師」の機能として知識の伝達は主要なことであるが、それは十分条件ではない。彼等の持つ包括的な教師像を構成するものは、知識、感情、行動すべての面での直接的なかかわりであるのではないか。こうして見ると、生徒がクラスの学習世話係に期待する役割は、最低限の管理責任の枠をはるかに超えていると言える。

この解釈は生徒と学習世話係の関係を一年生と二年生のクラスで比較することによってさらにはっきりする。一年生の学習世話係と異なり、二年生の学習世話係はもっぱら管理者としてのみ生徒に接した態度のために、生徒と親しい関係を築けなかったように見受けられる。生徒は自分達の学習世話係は「自分達を混乱させるだけだ。(“only confusing”)」と不満を言い「もう一人の先生」という位置づけを否定した。彼等の目には彼女は純粹に「教導員 (disciplinarian)」である。生徒達は「いてもいなくても同じだ」から、彼女はむしろ教室に来ない方がいいとまで思っていると言う。彼等によれば、彼女と彼等の間の距離は「彼女が日本語について何も知らない。」ことによるという。生徒達の彼女に対する尊敬を欠いた見方は、彼

の方にますます教導的な態度をとらせ、そして、皮肉なことにクラスの雰囲気は非常にゆるんだものになるというマイナスの効果を生み出しているようである⁽⁵⁾。

3-1-4 日本人留学生の役割

「教師達」のほかに、ミレッジ高校の一年生のクラスに固有の要素は日本人留学生である。日本語話者としての彼の役目の中心は、日本語に関する質問に答えて、モデルを示すことである。彼はインタビューの際に、「日本人だと言っても、時々日本語について説明できないこともあるし、わかっていても英語ではうまく説明できないこともある。」と語ってくれた。それにしても、彼は生徒の応答に対して即座に正しいかどうかのフィードバックを与えることで、生徒と講師が対面しないことによって起こる遠距離学習の問題点を、いくらか解決していると言えそうである。加えて、そのような実用的な役割と同等か、それ以上に重要なのは、日本語話者として教室にいるという存在そのものによって、生徒のやる気を伸長しているということであろう。

3-2 不安全感の少ない学習環境とインプット仮説

ミレッジ高校の通信衛星を使った日本語クラスの教室でのやりとりに注目してみると、最も顕著な性格は生徒が不安と緊張を感じることの少ない環境であるということである。生徒はテレビに向かって、またはスピーカーフォンの回りに適当に机を並べて位置し、教室の学習世話係は生徒の横か後ろに座る。授業中、特にテレビで場面スキットを見ている時など、笑い声が頻繁に起こり、楽しい雰囲気を醸し出しているのが感じられた。

このリラックスした雰囲気は確かに学習者の不安感・緊張感を少なくしている。その要因はいろいろある。(1)テレビ講師の親しみやすい教え方、(2)身近な内容とくだけた会話体の場面スキット、(3)しかられる危険がないなどである。特に、(3)について、生徒個人が指名されることがめったにならない上、約二か月に一度、スタジオと中継される時に一人ずつ指名されても、生徒は仲間と随時助け合う。教師と生徒が離れていることで、生徒は身の「安全」を感じ、たとえ間違っても、その緊張はごく一時的で、すぐやわらぐものであるようだ。

クラッシュエンは語学の習得に不安感を少なくし、「危険のない」環境にすることの有益さを説いた。SERCの指導では生徒は会話を強要されることなく、理解可能なインプット (comprehensible input) をふんだんに与え

られている。彼が主張するように、形式ばらない心地よい環境でなら理解力が伸びるかどうか、実際に調べてみる必要があると考え、調査した結果を次に述べる。

4. 日本語能力調査

4-1 調査方法

4-1-1 概要

調査の第二段階として、通信衛星講座を利用して学んでいる生徒の日本語能力は実際どうなのか、特に理解能力と発話・作文能力のバランスはどうかという疑問を抱き、また前半の授業観察とインタビューによる調査により、描き出された状況を裏付けする事はできるだろうかという疑問に答えるため、試験をしてみた。

試験は筆記と口頭の2種類からなり、口頭試験については、ACTFLの発話能力試験の指標 (Oral Proficiency Interview Test Guidelines) に従った。生徒一人一人に要した時間は3分から12分であった。

筆記試験は一、二年生用にそれぞれ別のものを作った。筆記試験作成にあたり、SERCが配布している教科書と学習世話係用教本(the Facilitator's Manual), 並びにSERCテストを検討することから始めた。私達が作成した試験は、教室で40分で行うことを目安にし、一、二年生共に四択問題18問、穴埋め問題と短文で答える問題16問、そして作文1問という構成になっている。この試験は、本質的に実力試験 (power test) であり、また学習者の優れた点と弱点を見極める診断テストであるという特徴を持っている。しかし、個々の生徒の診断をするのが目的ではなく、学習者グループの特徴を見るのが目的である⁽⁶⁾。

4-1-2 調査の限界

何といっても、最大の限界は調査した学習者の人数が少ないことである。前半の調査では、生徒全員を見ることができたが、この試験には、一年生10人のうち7人、二年生4人のうち3人が参加しただけとなり、これにより、私達の調査結果の一般化には大きな限界が伴うこととなる。また、アメリカの高校の日本語プログラムを調べた研究が、寡聞にしてほとんど見当たらないので、本調査結果と比較して、通信衛星による日本語教育の評価を行うということもなし得ない。

それから、SERCの教育目的には、日本文化への理解を深めるという項目

が含まれているが、この試験には取り立てて日本文化に関する理解度を調べるという問題は、含んでいないので、文化的観点を含んだ場合に調査結果が変わるかどうかはわからない⁽⁷⁾。

4-2 試験結果

4-2-1 口頭試験結果

ACTFLの指標によって分類すると、一年生クラスの7人のうち中級の下と判定された者が1人、初級の上3人、初級の中2人、初級の下1人であった。また二年生クラスの3人のうち1人が中級の下で、2人が初級の上であった。

被験者たちに共通の特徴と問題点として、項目のみ挙げると、英語（母語）使用、不確実な発音、単語または単文レベルに終始する文型、接続詞や副詞の不在などがある⁽⁸⁾。その他、コミュニケーション・ストラテジーの面で、話題選択、ターン・テーキング、文体の選択に関して問題が見られた。

4-2-2 筆記試験結果

筆記試験の結果を統計的に処理すると、正答率平均：54.4%，標準偏差：19.2という数値がえられたが、なにぶん被験者数が少なすぎるので、このような数値には重要性は見い出し難い。それで、ここでは筆記試験の答案に現れた特徴について述べてみたい。

全体的にひらがなは習得しているようであるが、カタカナは弱い。特に、二年生がそうであった。穴埋め及び短文で答える問題における誤答は、多い順に、綴り、助詞、時制と活用、語彙選択、文型に見られた。口頭試験での間違いに類似して、筆記試験においても、長音、促音、撥音、「つ」と「す」の区別、などに関わる間違いが多かったのは興味深い。

作文の項では、被験者は四つあるトピックの中から一つ選んで自由に作文することになっていた。生徒が書いた文の数の平均は一年生が7文なのに対し、二年生は4.5文であった。頻出した文型は「AはBです。」「Aがあります。」「AはBが好きです。」「Aをしました。」であった。複文を書いた者はいなかった。副詞や形容詞など修飾語を使った例もほとんど見られなかった。このセクションでも、綴りやカタカナの問題が見られた。漢字の使用はほとんど見られず、二年生では、中国系アメリカ人の生徒が一人使用しただけである。一年生では、2人が「日本語」と「本」を漢字で表記しただけである。作文を見るところ他に、正書法が問題であると確認

された。一年生の回答に見られる問題は、このレベルの学習者において一般的なものであると思われたが、二年生の生徒はかなり問題が化石化しており、二年間学習してきた割には貧弱な実力と言わざるを得ない。

4-3 試験結果のまとめ

4-3-1 特徴

まず全般的に、この日本語能力テストの結果を見ると、口頭試験の結果と筆記試験の結果には相関が見られるようだ。しかし、言語の四技能全てにおいて、学習期間を考慮すると、一年生の生徒のほうが、二年生の生徒よりも到達度が高いと思われる。

総じて、理解能力は発話・作文能力よりも発達しているようだが、言語の四技能についてみると、聴解力が最も優れていると思われる。母語話者の自然な発話速度にも怖じ気づかず、理解を示していた。これは普段の学習のかなりの部分が、テレビの視聴に費やされている結果ではないかと考えられる。読む力については、ひらがなは読めるが、カタカナと漢字が入ると相当つまづくようである。発話では、二年生の生徒は前述のように明らかに問題があるようである。例えば、一年生よりももっと英語に頼る傾向があったり、非常に初步的な間違いが化石化していたりするのが見られた。言語の四技能のうち、書く能力が一番劣っているように見受けられたが、単純な文をひらがなで書くことは比較的容易にできるようであった。一年生は丁度カタカナを習ったばかりで、ほとんどの生徒が書くことができたが、二年生は記憶が曖昧になっていた。さらにコミュニケーション能力に関する問題を二つ挙げれば、それは簡単に英語を使用してしまうことと、文体の使い分けができないことであろう。

4-3-2 二年生の結果に関する考察

ここで、二年生の生徒の能力が全体的に貧弱であることについて、その理由を考えると、次の点が挙げられる。まず、二年生の学習世話係について、彼女が自分の任務についてさほど強い使命感を持たず、事務的に処理しようとしたため、生徒が学習世話係を「先生」というより「管理者」として見て、あまり尊敬していなかった。それで両者の関係がうまくいっていなかったこと。次に、物理的制約として、二年生のテレビレッスンは、放映時間と学校の時間割との関係で、いつも昼食時に行われており、生徒は物を食べながらテレビレッスンを見るという状況であったこと。従って、口頭練習は実際的に不可能であったこと。複数の理由があるが、クラスの

雰囲気は弛緩しており、生徒はいつも緊張感がなかったこと。また、一年生のクラスにいるような日本語話者がいないので、生徒が間違っていたり、わからなかったりしても、それを即座に訂正したり、解明したりすることができないこと。

以上の他に、SERCの二年生のプログラムそれ自体にも問題があるようである。生徒とのインタビューによると、二年生のプログラムは一年生のほど面白くなく、繰り返しが多く、新鮮さに欠けるということである。

4-3-3 インプット仮説と学習世話係に関する考察

クラッシュエンは目標言語での理解可能なインプットによって、発話能力の自然な発達が導かれるとしているが、本調査の結果に限って言えば、インプット仮説は第二言語習得過程の初期段階に限って、ある程度裏付けられたと見ることができるであろう。

クラッシュエンはまた、言語学習において、不安感を低くすることの重要性を強調した。私達が調査した、通信衛星による日本語講座のクラスでは、不安感を低くすれば生徒が協力して学ぶことができるようだが、不安感を低くすることが、直接的にまた自動的によりよい学習に結びつくとは言えないようであり、そうするためにには何らかのメカニズムが必要であろう。その中心的な役割を果たすことができるのはこの場合、学習世話係であると思われる。

学習世話係は、遠距離学習でばらばらになった「教師」の様々な役割をつなぎ合わせる役目をしている。このように全体で調和のとれたまとまりをもって運営されるためには、個々の要素を教育的に意味のある形へとまとめていく技量が必要であり、例えば私達が二年生の学習世話係に見たような、機械的な管理の仕方ではやって行けないのでないだろうか。

しかし、残念ながら学習世話係の役割を、機械的事務的な生徒の管理と誤解している学校が少なからずあるそうで、一部には教育の専門家でない学校の事務員などにその役を任せているところもあり、「通信衛星の講座を殺してしまっている。」ということである。

5. 終わりに

今日の外国語教育全体から見れば、遠距離学習は周縁的地位にしかないが、アメリカでの高校生への日本語教育の中では主要な地位を占めつつある。しかし科学技術の進歩というものは完璧なものではない。遠距離学習

の問題点としてはウォリナー・バーク (Warriner-Burke) の指摘にも見られるように、生徒の受動的な態度や教師の監督の目が行き届かないことが多いと挙げられる。彼女も指摘しているように、この新しい試みとしての遠距離学習を評価するのは、経験的データに基づいた研究がほとんどないので非常に難しい。

私達の調査によると、うまく調整されれば、遠距離学習に向けられた批判もいくらか乗り越えられる。その調査の鍵になるのが、学習世話係の積極的な働きである。また、日本語話者がクラスに参加することが可能であれば、即座のフィードバックがないという遠距離学習の問題点がかなり解決できる。

本稿では遠距離学習で日本語を学ぶ二つの違ったクラスの状況を報告した。ミレッジ高校の一年生のクラスも二年生のクラスも共に、不安感の少ない環境で元気な生徒間のやりとりが見られたが、一年生の学習世話係の役割が生徒の高い評価を受けていたのに対し、二年生の学習世話係が、生徒の批判にさらされていたのは注目に値する。これは、学習世話係の責任感とやる気が生徒との関係に影響し、それがさらに生徒の学習にも影響するということであろう。

一年生のクラスに見られるように、学習世話係は遠く離れた教師と生徒のコミュニケーションを円滑に成り立たせ、その結果生徒の学習動機を高く保つために多大の貢献をすることができる。外国语教育を勧めたいが適当な教師が見つからないという状況で、遠距離学習をその代替案として考慮する場合には、この学習世話係の努力に学ぶものが多いと思われる。

注

- (1) この報告は全米外国语教育協会ACTFLの学会誌Foreign Language Annals, 26, No.1, pp.21-30に掲載された調査の後に独自で日本語能力調査をしたものを加えてまとめたものである。尚、調査研究及び英文でのまとめは季香順と真嶋潤子が合同で行ったが、日本語で本稿をまとめるに当たっては真嶋潤子が担当した。文責は真嶋にある。
- (2) SERCの講座を利用する高校は、各教室に、通信衛星講座がうまく機能するよう世話を担当する担当者 (facilitator : ファシリティーター) を配置するよう求められる。日本語の知識は問われないが、なるべく生徒と一緒に学ぶよう勧められる。後に詳述するように、その担当者の割合は、当人の考え方や受け取り方によってかなり差があるが、このプログラムに独特であり、かつ教育的

に非常に重要であると思われる。その人のことを、本稿では、学習世話係と呼んでおく。

- (3) T. ライトはグループにおける「位置 (position)」と「地位 (status)」とを区別している。広義において、「位置」はその社会的組織の中で個人が持つ役割を示しているのに対し、「地位」はその組織の他の構成員がその個人の役割の果たし方をどう評価しているかに基づいた力または権力構造に依拠している。一個人の「位置」と「地位」は必ずしも同じでなく、グループダイナミックに影響を及ぼすのは「位置」よりむしろ「地位」のほうである。
- (4) この狭い意味での「教師」の見方、即ち教師の権威やアイデンティティが「知識」に根差しているとする見方の良い例が、一生徒が学習世話係を教室でどう呼んでいるかに現れている。一年生の生徒のほとんどが学習世話係のことを「○○先生 (Mr.XXX)」と呼んでいるのに、一人だけ先生の下の名前で呼んでいるのである。これはこの生徒が学習世話係を単なる技術的な管理者 (manager) かもしくは「級友」だと捉えたことによるうちとけた感情の現れだと考えられる。
- (5) この例を挙げれば、学習世話係担当小テストというものがあり、成績の10%を占めるのであるが、二年生の生徒はこれをあまりはじめに受けていない。と言うのも、彼等に言わせれば彼女は「採点する能力がない」からである。しかしこのテストは全問記号選択式でSERCからの解答もあり、彼女にも採点できるわけで、生徒のこの批判はあたらない。生徒の言葉は彼等の学習世話係との気まずい感情の現れであると言えよう。その感情は教室での彼等の不真面目な態度にも現れている。私達が目にした最も極端な事例は学習世話係担当小テストを返してもらった生徒達が、それを受け取るやいなや、丸めてごみ箱に捨ててしまったことである。
- (6) この試験の信頼性を調べたところ (Kuder-Richardson Formula 21による), 0.9788という高い度数を得た。即ち、この数字で見る限り、この試験結果は偶然によって左右された度合いが低いと考えてもよいだろう。
- (7) SERCの通信講座の教育目的、シラバス、アプローチその他の吟味をして、プログラム自体の評価をすることは本稿の目的とするところではないが、SERCの教育目的を紹介しておくと、日本語の四技能を伸ばし、日本の文化への導入をするということであり、具体的に次の四点が挙げられている。1) 日本語で簡単なやりとりができるように基本的な文型と語彙を習得すること、2) ひらがな、カタカナ、及び幾つかの漢字に親しむこと、3) 日本文化、日本人、日本の社会を理解し評価すること、4) 生徒の考え方を広げ、自己及び世界の認識を広げることである。(SERC Japanese I : Facilitator's Manual.より)
- (8) ほとんどの生徒が、応答に行き詰まると英語を使用するのが見られたが、一

年生よりも特に二年生にこの傾向が強かった。英語の使用は五つの種類に分類できる。使用頻度の高い順に、①英語の構文に日本語の語彙を使用したものの、②日本語の構文で和英語彙が混在するもの、③和文、和語彙の直後に英訳がつくもの、④英語の埋め草、即ち“Wait,” “Well,” “Is it right ?”等の言葉が入る場合、⑤完全な英文の場合となった。

参考文献

- (1) Brod, Richard I., ed. (1980) *Language Study for the 1980s : Reports of the MLA-ACLS Language Task Forces.* NY : MLA.
- (2) Brod, Richard I. (1988) “Foreign Language Enrollments in US Institutions of Higher Education, Fall. 1986” *Association of Departments of Foreign Languages Bulletin*, January 19 : 39-44.
- (3) Gallego, Juan Carlos. (1992) “Tele-Classes : The Way of the Future : A Report on a Language Exchange Via Satellite.” *Foreign Language Annals* 25 : 51-58.
- (4) Georgia Department of Education. (1992) *Foreign Languages in Georgia's Public Schools 1991-92*. Atlanta, GA.
- (5) Hord, Shirley M. (1987) *Evaluating Educational Innovation*. London : Croom Helm.
- (6) Jorden, Eleanor H. & Lambert, Richard D. (1991) *Japanese Language Instruction in the United States : Resources, Practice, and Investment Strategy. NFLC Monograph Series*. Washington, DC : National Foreign Language Center.
- (7) Kataoka, Hiroko C. (1986) “Televised Japanese Language Program : The First Year.” *Foreign Language Annals* 19 : 491-498.
- (8) Keegan, Desmond. (1986) *Foundations of Distance Education. Second Edition*. London : Routledge.
- (9) Krashen, Stephen. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford : Pergamon.
- (10) Krashen, Stephen. (1983) *The Natural Approach : Language Acquisition in the Classroom*. Oxford : Pergamon.
- (11) Lambert, Richard D. (1991) *Distance Education and Foreign Languages. NFLC Occasional Paper Series*. Washington, DC : National Foreign Language Center.
- (12) Patton, Michael Q. (1990) *Qualitative Evaluation and Research Methods. Second Edition*. Newbury Park, CA : SAGE Publications.
- (13) Rivers, Wilga M., ed. (1987) *Interactive Language Teaching*. NY :

Cambridge University Press.

- (14) The Satellite Educational Resources Consortium. (1991) *SERC Japanese I : Facilitator's Manual*. Lincoln : Nebraska Department of Education & Nebraska Educational Telecommunications Commission.
- (15) The Satellite Educational Resources Consortium. (1991) *SERC Japanese I : Student Manual*. Lincoln : Nebraska Department of Education & Nebraska Educational Telecommunications Commission.
- (16) Sussex, Roland. (1991) "Current Issues in Distance Language Education and Open Learning : An Overview and an Australian Perspective," 177-193 in Gerard L. Ervin, ed., *International Perspectives on Foreign Language Teaching*. Lincolnwood, IL : National Textbook Company.
- (17) Walton, A. Ronald. (1992) *Expanding the Vision of Foreign Language Education : Enter the Less Commonly Taught Languages. NFLC Occasional Paper Series*. Washington, DC : National Foreign Language Center.
- (18) Warriner-Burke, Helen P. (1990) "Distance Learning : What We Don't Know Can Hurt Us." *Foreign Language Annals* 23 : 129-133.
- (19) Wohlert, Harry S. (1989) "German By Satellite : Technology-Enhanced Distance Learning," 201-210, in Wm. Flint Smith, ed., *Modern Technology in Foreign Language Education : Applications and Projects*. Lincolnwood, IL : National Textbook Company.
- (20) Wright, Tony. (1987) *Roles of Teachers and Learners*. Oxford : Oxford University Press.

(ジョージア大学大学院)